

三 古代鞠智城と東アジア

佐藤 信

御紹介いただきました佐藤信です。昨年も、話をさせていただいたので、一部重なるかもしれませんが、鞠智城と東アジアとの関係に焦点をあわせてお話させていただきたいと思います。

この間、熊本県教育委員会による発掘調査によって、鞠智城の実態が考古学的に大分明らかになってきました、それとともに、鞠智城が歴史的にどういう意義を持ったか、ということを変更して直すことが課題になってきている、と思います。そのなかでも、日本古代国家の確立過程、そして東アジアの国際関係の中で鞠智城をどう捉えるかということが、重要なテーマになってきていると思います。それを、今日は三つのテーマにわけてお話しようと思っております。

一 白村江の敗戦と鞠智城

一つは、白村江の敗戦と鞠智城というテーマであります。これまでの先生方のお話にもありましたように、鞠智城が最初に文献に出てくるのが『続日本紀』



写真 20 佐藤 信氏

ます。そして、六九八年の時も「大宰府をして繕ろわしむ」という『続日本紀』の記載を見れば、鞠智城の造営という事業が単に地方豪族に任せるといふようなかたちではなくて、国家的に造営が行われたということを示しているといえます。この記事によって、大野城、基肄城の築城記事に鞠智城の築城もつなげて考えてよいのではないか、と思います。

六六三年の白村江の敗戦のインパクトで築城が始まったということは、国際環境の大変緊張した情勢への対応として、鞠智城も築かれたことになります。鞠智城の規模が大変大きいということが、矢野さんのお話でわかったのですけれども、それを緊急に築かなければならなかったわけです。そういう事情が当時の倭国にはあった、と考えた方がいい。それはやはり白村江の敗戦による緊張関

の文武天皇二年（六九八）条で、大野城や基肄城と一緒に、「大宰府をして大野、基肄、鞠智の三つの城を繕わしむ」、修理させるといふことが書かれています。したがって、私も、笹山晴生先生のお話にありましたように、『日本書紀』には六六五年に大野城・基肄城などを百済からの亡命貴族である憶礼福留・泗泚福夫らの指導の下に築城したという記事があるのに対して、鞠智城には築城記事がみえないのですが、同じ時期に建てられて、同じ時期に修理が必要になったとみることができると思います。私は、やはり同時期の築城でいいのだろうと考え

係に対する対外的な意図というものを重く見るべきではないかと思っています。

五百旗頭先生のお話にありました、白村江の戦いの具体像においても、私は、やはり倭国の国家が全力を挙げて戦った戦争だったとみています。大王や、後の皇太子に相当する中大兄、内臣の中臣鎌足も含めて、王権の中枢部総動員で九州にわざわざ王宮を移して、戦争を指導するということとはなかなか無いことであります。したがって、その敗北というのは、やはり大きな緊張感をもたらしただろうと思います。

ただし、戦いにおける倭の軍勢の構成は、地方豪族である国造の軍勢の寄せ集めでした。これまでの古代史研究では、「国造軍」というように呼んでおりますけれども、地方豪族軍の集合体が倭軍の実体であった。これは唐軍のような、律令軍団制に基づく指揮命令系統の行きとどいた軍隊ではないわけでして、瞬く間に敗北を喫したという結果は予め分かっていたようなことであつたかと思えます。この戦いに肥後の地方豪族も参戦していたこと

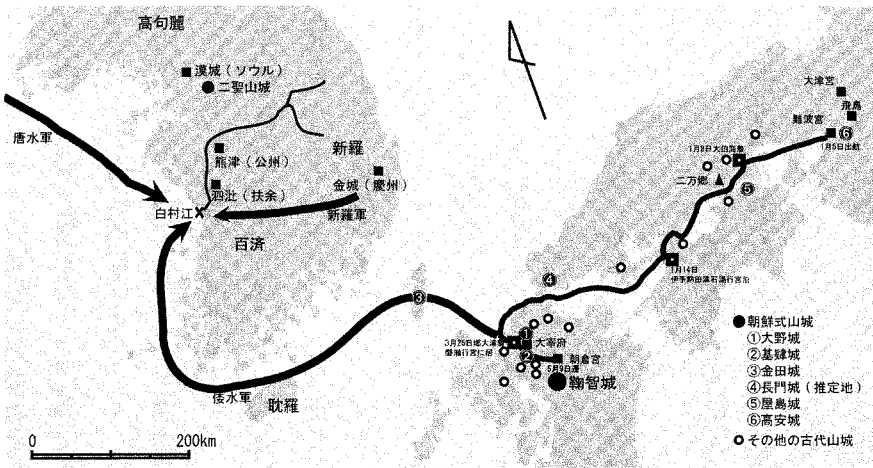


図 15 齊明天皇移動経路と白村江の戦い

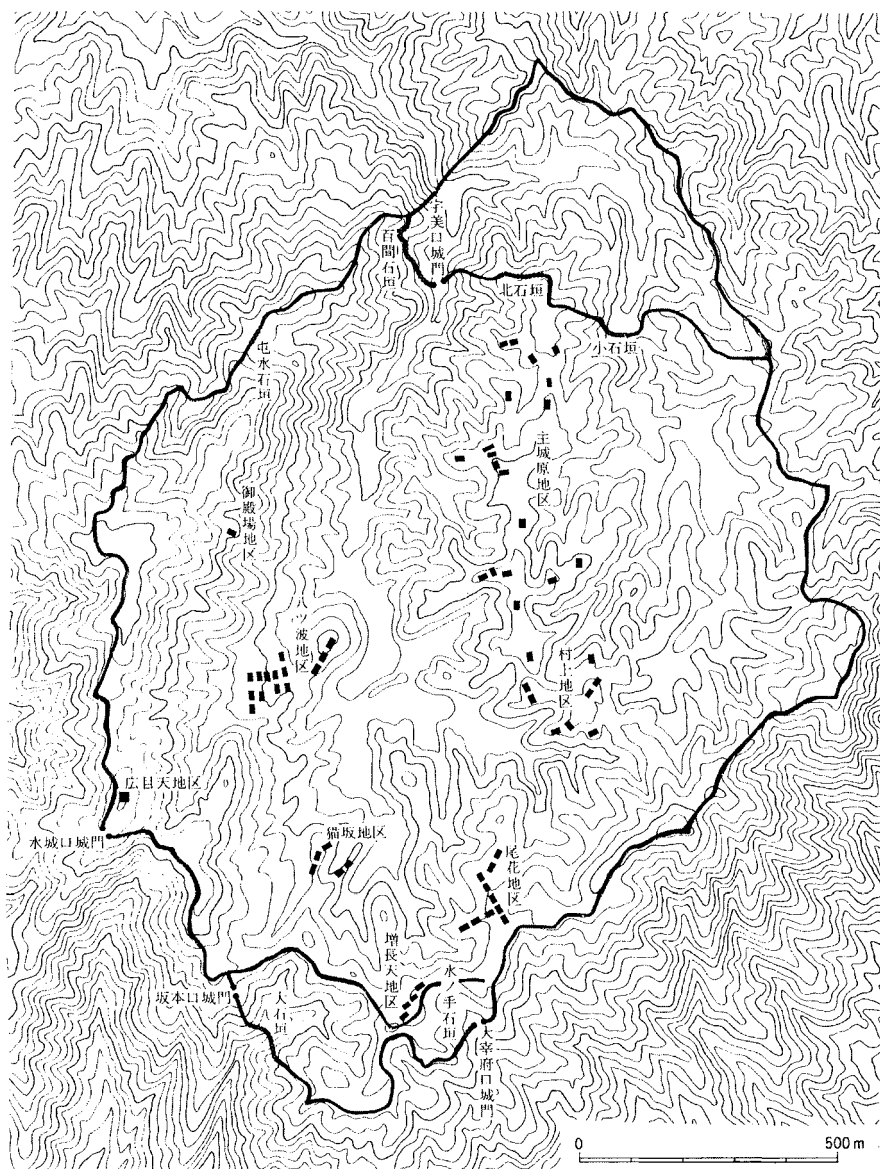


図 16 大野城平面図
(石松・桑原 1985 年より)

は、後に、捕虜として中国に連れて行かれた後帰国した人の記事が『日本書紀』にありまして、鈴木先生もふれられましたが、確認できるわけです。白村江の戦いに連なる百濟復興を支援するための軍勢派遣の中には、倭のかなりの地域の地方豪族が参戦していました。そして彼らが敗北を体験したということが、その次の時代に中央集権的な律令国家を形成しようとする動きに結びついたので。地方豪族側も中央集権化の必要性を認識したという面で、大きな意味があったのではないかなと思っています。

さて、鞠智城の築城に関しては、大野城（図一六）・基肄城についての『日本書紀』の築城記事にありますように、直接的には百濟の技術を用いた築城が行われたと思います。例えば、水城の土塁版築の際に用いられた「粗朶敷き」という木の枝を敷き込んで土塁が揺るがないようにする工法、あるいは柱を版築の中に埋め込んでいく工法、また水城の土塁の下層に水はけのための暗渠を築く際の技術の高さなどは、やはり朝鮮半島系の技術が用いられたのでしょう。あるいは大野城には「百間石垣」と呼ばれている立派な石垣がありますけれども、あの積み方もそれまでの日本列島には無い石の積み方であると思います。具体的な遺跡・遺構として、半島の技術というものを発掘調査の成果として見るができるだろうと思います。

二 鞠智城の歴史的背景と東アジア

鞠智城の方に話を移しますと、私は鞠智城の存在は先ほど申し上げたように、有明海と東アジア

との関係の中で把握できるのではないか、と思っています。色々な記事があるわけですが、例えば、筑紫国造磐井が倭の大王権力に対して反旗を翻したという戦いがありますけれども、『日本書紀』によれば、その時に磐井の側は高句麗、百濟、新羅、伽耶からの外交使節を大和まで行かせず、九州の自らのところに外交使節を引き込んで対外交渉を行ったという記事があります。また磐井の勢力基盤は、自分の本拠である筑紫だけでなく、火の国、豊の国にまで及ぶ勢力基盤を持っていた。そして、その時代の彼の勢力圏を示すものとして、考古学的には石人・石馬文化圏が指摘できます。埴輪ではなくて、石人・石馬を古墳の埴丘に並べて飾るという文化圏がちょうど磐井の勢力圏と重なるわけです。時代も六世紀の前半に展開してから急に無くなってしまふというところが符合するわけであります。その際に、石人・石馬に使われる素材の石が阿蘇の凝灰岩だということもあって、この時代、磐井が東アジアの国際関係の中で戦いを起こした基盤として、筑紫だけではなく、火の国、豊の国の豪族たちも、私は入っていたらうと思います。九州における、そうした地方豪族の動きとオーバラップするかたちで、大王の方も菊池川沿いにある江田船山古墳の出土鉄刀の銘文にありますように進出し、ワカタケル大王と手を結ぶ方向で九州の豪族が動くという場合もあったものと思っています。

私は、有明海が大陸・半島に向かって開かれていた場であると思っています。それは、例えば白村江の敗戦後に置かれた烽（とぶひ）、烽火のネットワークが有明海側にもセットされて、『肥前国風土記』にみられるように、有明海側にも外敵襲来を速報するためのシステムが築かれていることに見ることができると思います。

また、大宰府を護るための施設として、水城が有名ですが、南側にも水城が築かれたということもあります。基肄城や大宰府東南で最近発見された阿志岐山城も含めて、南に対する護りというものも行っているのです。私は、海外に向かって開かれた有明海をもっと注目してよいと思っています。

先ほど鈴木先生が、白村江の後新羅と倭は仲が良くなってきたので、むしろ唐に対する緊張関係を重視した方がよいというお話をされたのですが、そうしますとちょうど後の一二世紀のモンゴル襲来の時も、北から攻めてくる朝鮮半島の高麗国の軍勢とは別に中国本土の江南軍は東シナ海を越えて渡ってきます。東シナ海を越えて九州にまっすぐ向かうと、有明海にぶつかるとはならないかと思えます。実際には、長崎県の方で元の両軍が一緒になってから攻めてくるということがありました。たが、そういう国際的な位置関係で、有明海を捉えてもいいものと思っています。

また、この地域の地方豪族の目からも鞠智城を見てみる必要があります。先ほど大野城などを国家が築城したと言いましたが、築城に際しては、もちろん当時の倭の大王権力の関与があります。しかし、国家だけではなくて、やはり地域の豪族もそれに協力して築いたのではないか、と思います。

地域の豪族を鞠智城の周辺で見ると、私は、火の君という、火の国を代表する豪族に注目します。また、そうした中では、火葦北国造の阿利斯登あかしとという豪族が半島に派遣されて、対外関係で活躍したということがあります。その息子である日羅という人物が百済の高官に上っていて、倭の大王が外交関係の諮問を行うために呼び寄せたという記事が『日本書紀』敏達天皇条にあります。これも、

火の国の地方豪族が国際関係の場で活躍しているという様子、その子が実際に百済の有力な高官にまで上っているということであり、そういう人材が育つ場所であったとみるわけです。

また、古代史を学んでいる人間は、八世紀初めの大宝年間の、筑前国の戸籍という史料が正倉院文書に残っていることを知っています。そこに、筑前国の嶋郡という郡の郡司の長官である大領として肥君猪手という豪族がいます。

これは今の福岡県糸島市の地で、肥後国の、肥君（火の君）出身の一員が北九州の博多湾に面した、嶋郡の代表者になっていることを示します。

嶋郡というのは伊都郡と一体の地です。弥生時代の伊都国といえば、耶馬台国の対外関係の最先端の地域ですけれども、その郡の郡司になっ
ていて、その郡には古代の山城が築かれたという記録もあります。すなわち、有明海側だけではなく、博多湾側でも肥君が活躍しているという姿を見ることができるのです。

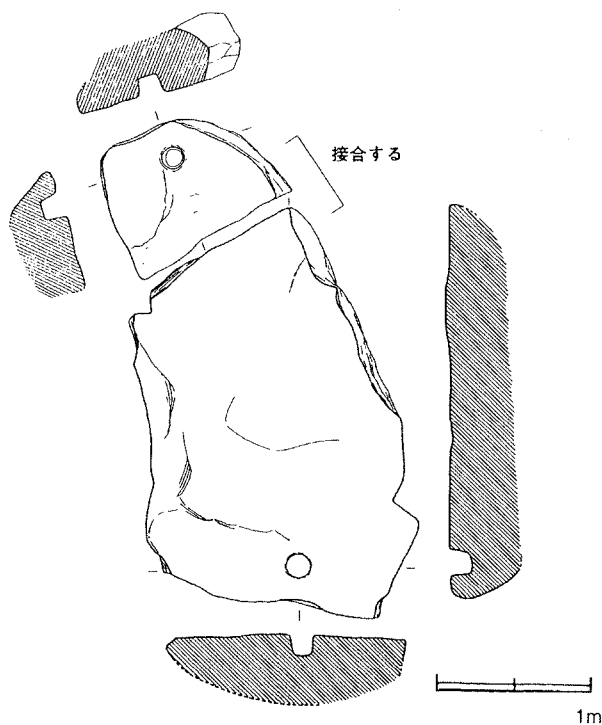


図 17 堀切門の門礎石実測図

また、南九州の隼人との関係で、鞠智城を捉えようという考え方もあります。その際にやはり気になるのは、薩摩国の出水郡と薩摩郡の郡司に肥君がいるのです。軍功を収めて勲位まで貰っている人で、出水郡の大領は肥君であるし、薩摩郡でも肥君が郡司をしているということで、肥君が北九州でも南九州でも活躍するような、そういう対外的な交流に手慣れた地方豪族であつたとみるこ
とができるのではないかと思います。

三 鞠智城の築城と東アジア

さて、鞠智城跡と東アジアとの関係について考えてみると、これまで行われた長期にわたる熊本県教育委員会の発掘調査で本当に多くの成果が上がっています。本日のシンポジウムのように、改めてその成果をまとめていただいて大変ありがたく思います。

その中で東アジアとの関係として私が注目したいのは、まず古代の朝鮮式山城であるということです。朝鮮半島における築城技術との対比が気になります。私は、先ほど鈴木先生も言われたのですけれども、城門の構造が課題だと考えます。特に堀切門の構造などは大変注目しております。たぶんこれから十分に日韓の比較研究ができるのではないのでしょうか。また、石垣についても、先ほど大野城の百間石垣の話をしましたけれども、十分に比較検討していただきたい。鞠智城の場合は、門の礎石（図一七）が非常に特徴的だと思います。そういったものや、水門の構造、併せて版築の在り方などについても、技術的な比較検討をしていただきたい。

それから八角形建物、貯水池、貯木場の在り方などは、朝鮮半島のものとの類似性が指摘できると思います。韓国の二聖山城には、八角形の建物もあるし、貯水池もある。二聖山城の場合は、百濟地域ですが、先ほど西谷先生がいわれたように新羅時代の構造かもしれませんけれども、こうした朝鮮半島における山城との具体的な遺構の比較をお願いしたい。それから、遺物の方でも、比較検討が望まれます。百濟系の小金銅仏は、もちろん素晴らしい代表的な遺物ですが、その他にも百濟系の瓦との関係など、検討していただきたいと思っております。

四 鞠智城の築城とその機能

また、矢野さんの御報告のなかで、第Ⅰ期、第Ⅱ期、第Ⅲ期というように、昨年まではなかなかまとまっていなかった遺構の時期区分をした上で、鞠智城の構造についてまとめていただいたことは、大変ありがたかったと思っております。おそらく第Ⅰ期は、白村江の直後に築城した時期であるのとみて間違いない。第Ⅱ期は、おそらく『続日本紀』に載っている六九八年の大宰府による修理で、その成果が第Ⅱ期の遺構になっているだろうと思います。最後の第Ⅲ期は、それではどうか、第Ⅲ期は、一番立派な大形の礎石建ちの建物になっている。

鞠智城というと、国家的に造営された第Ⅰ期はもちろん重要なのですが、また第Ⅱ期も国家的な修理で重要だと思えますが、第Ⅲ期の方がもっと立派になっていることは、どうとらえたらいいか。日本の歴史の上でどのように考えたらいいか、ということこれから考えていかななくてはならない

と思います。

ということでは、

鞠智城の機能について、鈴木先生のお話によれば、東アジアどころか東ユーラシアという規模でみないと視野が狭いとお叱りを受けるかもしれません。東アジアにおける対外的な関係から考えてきました。有明海に向けた東アジアとの関係でみるの

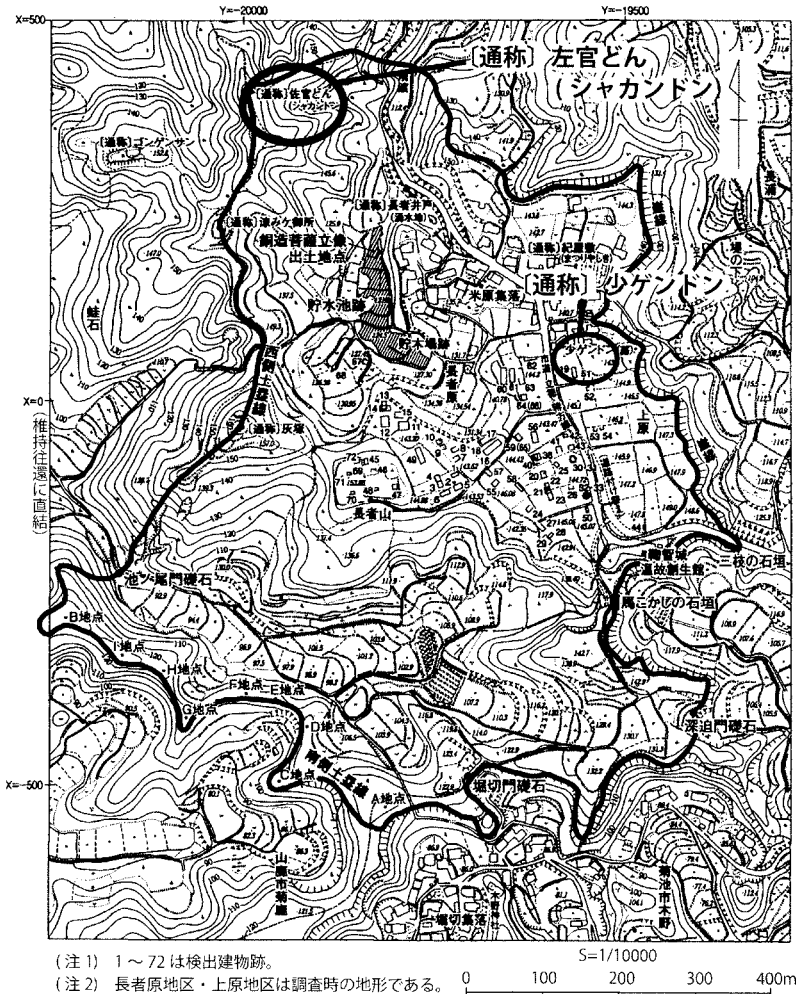


図18 鞠智城跡と左官どん・少ゲンドンの位置

か、大宰府の後方支援でみるのか、あるいは九州南部対策でみるのか、という鞠智城の機能の問題がありました。

私は、鞠智城は実はそれぞれすべての機能を持つていて、それぞれの時代にそれぞれの機能が重点を変えながら存在したのではないかと考えております。さらに、それと重複して、軍事的機能と行政的機能と財政的機能というものがあるのではないか、とと思っています。城ですから軍事的機能が第一だとは思いますが、ここに役所が置かれ、そして大量の稲穀が貯蔵されているということなのです。

大宰府から出土した木簡の中に、基肄城に納めてあった大量の稲穀を筑前や筑後や肥の、肥はおそらく肥前、肥後両方だと思いますが、その諸国に分かつために、大宰府の役人が基肄城に派遣されたという木簡がありまして、鞠智城にあった大量の稲穀も私は大宰府の管轄下にあったものだと

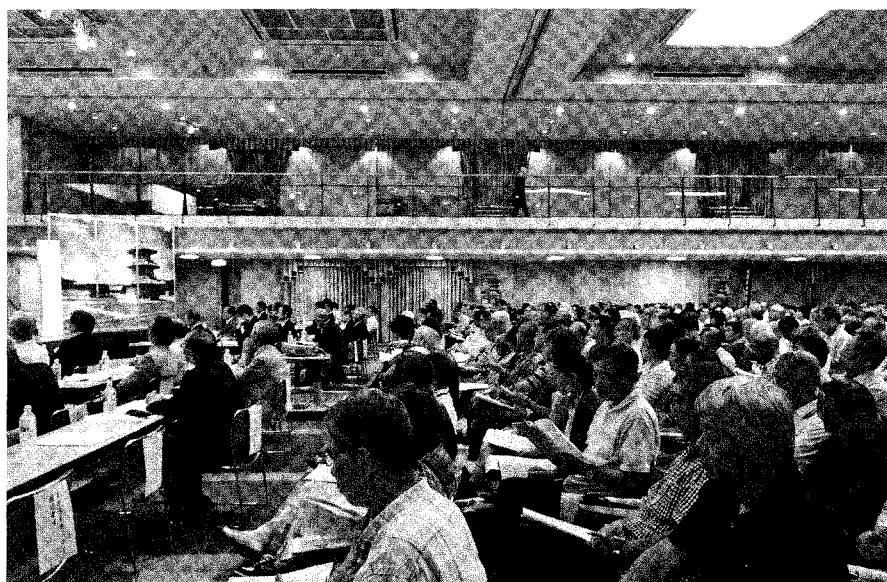


写真 21 会場風景 (2)

考えます。

ただし、城を実際に現地で管理するのは、やはり大宰府の下で「鞠智城司」というような、鞠智城の司として派遣された官人がいたと思います。東北地方の古代城柵というと、城に派遣される「城司」は、国司の一員である場合がありますので、肥後国司との関係を鞠智城にみることもできると思います。したがって、肥後国司の中の介（すけ）とか丞（じょう）とか目（さかん）とかいう官人が鞠智城に出張って、それを管理するということもあり得るかと思います。

また、大宰府の官人が派遣される場合もあります。そうすると、地名では「シャカンドン」というのですか、「目殿」だとか、「ショウゲンドン」というのがあるそうで、ショウゲンになると大宰府の官人「少監」だと思えますけれども、そういった官人が城司に任じられることがあったかもしれません（図一八）。

いずれにしても、東ユーラシア、東アジアとの関係と同時に、中央政府との関係、大宰府との関係、肥後国司との関係、地元の菊池郡の郡司、あるいは在地の豪族との関係の中で、重層的に、あるいは多元的、多機能的に鞠智城を捉えていかないといけないのではないかと思います。

ちよつと時間をオーバーしましたが、これで終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。